

時の楔

<> 語…に関する 資料集

{時の楔}に関するレジュメ

～1978・3・25～

{自主ゼミ}実行委員会 気付{松下 昇～未宇}

{時の楔}とは何か。何かの必然によってこのテーマに出会う人が、それまでの経過を全く知らないで仮定した場合の{私}たちからのヴィジョンを提起してみる。この提起によって、{時の楔}というものが、固定した作業目標ではなく、すでに自らもその出現過程にどこかでかかわってしまっているのではないかと、という位相に自らの関係性を発見していただければ幸いである。{私}たちの非力のために経過や問題点の説明が不十分であったり、錯誤していると考えられる場合には、いつでも逆提起をしてほしい。

なお、このレジュメの原本は<占拠中のゼロックス室>(意味については、正本<ドイツ語の本>や、この空間におけるn回の拡大自主ゼミの経過から把握していく必要がある。)に、関連する<資料>群と共にしておくことを強調したい。

{時の楔}を、いま過渡的に、1977年10月から1978年3月までの期間に、{自主ゼミ}実行委員会の活動がつくりだし、同時に出会っている<資料>の対象化作業の一形態としてのパンフレットの題名である、と考えていくことにする。

{自主ゼミ}実行委員会とは何か、については、{時の楔}とは何か、と問うると同位相の困難さがつきまとうが、一応、前記のパンフレットの企画に具体的にかかわろうとしている人たちの関係性を想定してもらえばよい。(本質的には、この概念は、途方もなく飛翔していくのであるが、あくまで発想の一つの基軸としておべていることに注意。)

無数の本やパンフレットがあふれている世界の中で、パンフレットを仮装する{時の楔}の出現を必然たらしめる要因については、可視的には、三一書房刊「ドイツ語の本」(1977年3月第一刷発行)と正本<ドイツ語の本>(1977年

9月発行)との連続性を手がかりにしてみる。その際、最低限いっておくべきことは、この連続性が、たんに時間的にあるというのではなく、それぞれの出現過程自体が対象化されつつ次の本ないしパンフレットの構想がうまれていること(1977・12・6拡大自主ゼミに至る過程、と題するレジュメ参照)、および、そのために必要な作業を、その素材が主体にしいてくる時間的かつ現実的に切迫しているテーマとの関連でおこなおうとしていることである。({ 1978・1・20拡大自主ゼミ } レジュメ参照)

このような方向性で企画が具体化したのは1977年10月であり、そのとき試案として出された<資料構成リスト>は、前記1977・12・6と1978・1・20拡大自主ゼミをくぐりぬけて、質量ともに変化しており、<資料>を総体として把握すること自体が大きい困難と把握の根拠の変換をしいてくるのであるが、その概略的な構成～問題点をかいまみておく必要があるだろう。({ 時の楔 } 構成リスト参照)

いま、かいまみている構成～問題点についてわき上ってくるヴィジョンを断片的に記してみると……。

※₁ 作業の基底で問われ続けているのは、大学～制度とのかかわり、出版～表現の前提を、全て疑いなおす必要のある現状況の位置。

※₂ これは、具体的な { 時の楔 } の発行についてだけでなく、大学闘争のもつ世界(史)性の質と量がしいてくる条件である。

※₃ 起訴状・大学広報の水準の資料集の創出さえなしえていない自己～批判からの出立。もちろん、共同幻想としての法や体制に、そのような総括をしい、無意識の共闘をさせ続けていることは逆用しうる成果の一つであるとはいえ、そのような逆用をしいてくる根拠の最終的転倒～解体へのはるかさに自覚的であれということである。

※。闘争に好意的な出版社の70年代にわたるいくつかの申し出にもかかわらず、企画が実現しなかった経緯、1971～72年に六甲で試みられた闘争史発行の宙吊りの経過についても、対象化すべき課題が集積している。(仮題神戸大学闘争史発行委員会「<闘争史>発行運動を問うために」その1～3～を参照)

※。ふしぎな、かつ必然的な一周というべきであろうが、6年前の企画においても、{私}たちは現在と同じ問題、表現と掲載のズレの止揚、発行委員会の仮装性、構成リストの膨大さなどとりくみ、その作業は宙吊りになったとはいえ、そのときの手ごたえを忘れずに生きてきたつもりでいる。(1976・5・16付の前記の発行委員会メンバーの一人から購読予約者あての提起を参照)

※。従って、現在、{私}たちが、別の位置で、別の構成リストを作成している、ということはないが、もし、当時と現在の構成リストに差異があるとすれば、6年前のリストは、その一つ一つがほぼピラなどで公開されており、テーマとして分類しやすかったのに対し、現在のリストは出現～開示の範囲が、さまざまの幻想領域を横断しつつ孤立しており、テーマごとに、まるで別の星雲に投げこまれたような異相を呈するであろうということであり、これこそ情況の困難さの証し(同時に、ほんとうの何かが始まる証し)と考えてよい。

※。前にのべた「1977年10月から1978年3月までに～つくりだし、同時に出会っている」<資料>の時間性は、たんに現在に最も近い6カ月という以上の意味をもつ。

※。1977年10月は{時の楔}の企画が、正本<ドイツ語の本>発行と同時期に(ということはずしも同方向性でというのではなく、発行以降の応用振幅を最大限にしていくねらいをもつ)出現した段階であり、1978年

3月には、三一版「ドイツ語の本」が、発行後さいしょの単位認定終了にさしかかる段階である。

※。従って、先験的に何かの本やパンフや、それについての企画があって、個々に完結性を帯びているのではなく、それらを可視的な媒介とする関係性の運動の総体こそがより巨大な発行の過程ないし実体であるといえる。

※₁₀ この把握方法は、一つ一つの〈資料〉と相互関係についてもあてはまるし、すでに1960年代から予感的に実践してきた原則でもある。

※₁₁ ただし、これは、表現は情況と切りはなしてとらえてはならない、という一般論におとしめて理解したり提起したりすることとは全く異なる。そのような風化しやすい一般論と最も鋭く対立し続けてきた長い痛苦の過程が{私}たちの背後にあるからである。

※₁₂ 闘争過程における〈資料〉集を出していくことが自明にプラスである、という前提を、もし、もう一度つき放して考えてみると、それは大学闘争の課題が、言語の発生以来の諸領域はそれぞれの諸領域の区分ないし根拠の解体の水準でしか真に対象化しえないのではないか、という直感から出立していることをかみしめねばならない。

※₁₃ 前記のことは任意のテーマから論じることが可能であり、しいられた任意性の一つでさえも膨大な問題群へ対数的に拡大していき、生活ないし生涯をかけても、なおその一断片にふれるにすぎないという絶望に似た感覚の断崖に{私}たちを立たせる。

※₁₄ {時の楔}の作業について、この感覚を少しずつのべてみよう。わずか数カ月という短い期間にしぼった〈資料〉群についてさえも、それらを集め、

配列し、編集していく準備は大きい困難にぶつかる。一つ一つを確認し、コピーをとり、討論のための配布をおこなう経済的・労力的な重圧は、ここでは省くとしても、全くその存在さえ確認されないまま、ある力を及ぼしているもの、原本性の宙吊りのために複製不可能なもの……。

※₁₅ そして、パンを得る日々の仕事の合間に、あるいはその仕事を放棄～中断して一定の作業をすすめたとして、何度もかすめる想いは、このように集め、配列し、コピーし、配布し……という過程が、 n 次元の渦を平面化し、既成事実化し、固定化していくことへの加担ではないか、という不安である。

※₁₆ 一枚のメモでさえ、それに出会い、討論の媒介となるまでに巡礼してきている過程でくぐっている問題、作り出している別のメモなどと切り離してとらえられないし、メモにさえならない領域を包括しようとする作業は殆んどすすまず、〈資料〉が存在する自然的時間が〈資料〉を対象化する時間に比してあまりにも短く、虚しいという感慨さえわいてくる。

※₁₇ だから時として内部にひびく声は、この方法を捨てよ、〈資料〉はそれ自体として存在し、消滅するにまかせよ、それが、私たちの生きざまをふくむより巨大な〈資料〉集でもあるのだから、とささやく。

※₁₈ この声は非常に魅惑的である。しかし、この一行の声に、もしもひきこまれてしまえば、長い苦闘の中でやっと誕生しつつある{卵}たちの生命を一瞬にうちくだいてしまう危険から解放されはしない、といううめきの方が生きのびつつあるし、生きのびる責任もあるのだ。無数の領域の死者たちのためにも。

※₁₉ 先ほどの一行の声がひびくにまかせておく他ない瞬間が、いつかはやってくるとしても、その一行の声に至るまでの過程は無数にあり、その宇宙を最

大限に巡礼する努力を抜きにして、一行の声に耳を傾けたり発したりすることは決して{ }から許されない、という祈りに似た気持が、この瞬間の作業を支えている。

※₂₀ 同時に、いま開始している作業は、それ自体いかに困難であるとしても、ほんとうは、いまなしうる最もやりやすいことであり、しかも、いまは全く隔絶しているように見える領域の作業への必須の回路としても、この作業が不可欠なのだ、という想いが燃えているのを阻止できない。

※₂₁ 冒頭にのべた時期の区分、制約内のテーマ、という方法も、その実践の徹底化が逆に、それ以外の時期やテーマへの展望をきり拓くこともありうるし、{時の奥}プランでつきあたる手ごたえは、より巨大な(もしかしたら世代をいくつか重ねるほどの)時間性をもつ{ }の構造の一端を明らかにするだろう。総体の把握を可能にする一端を。

※₂₂ いうまでもなく、{私}たちが、どのように重要性をこめているつもり作業でも、別の位置からは全く関心の外にあるか、錯誤にみちたものとみなされうる。これに対して{私}たちは、おそらくそうでありうるとして、関心の外においたり、たんに～とみなすことではやりすぎせない、{私}たちと{あなた}方の出会いの場から問題を取りだし、対象化しようとしてきた。大学闘争の全ての本質的な問題(とくに、その把握が発想～生き方の水準を開示してしまう単位制の問題)がそうであるように。

※₂₃ もしかしたら、{私}たちの方法は、現在までの詩あるいは詩的な立場と深く異なる位相で出現してきている。これは詩を政治や恋や～やをふくむ他のどのような立場におきかえても成り立つといい切る覚悟の後にいえる、ないし実践している方法である。

※₂₄ 国家にむかって詩をかくことができるか、という1970年代のある詩人の提起をさらに深め、拡大し、未字的な試みに心を熱くして漂い行こうとする際に目にうつるのは、すでに出現している{時の楔}の表紙である。{あなた}は、その出現や巡礼過程にどのように参加しうるか。

※₂₅ 提起に耳を傾けない膨大な存在、世界のこちら側の{私}たちに可視的な提起をしない存在～の総体を参加させえないような詩は(そして詩を支える現実的基盤も)もはや成立不可能ではないか。

※₂₆ {あなた}の存在の様式が、すでに{時の楔}の表紙をめぐっているとして、その内容は{あなた}にとってどのようなものであるか全く不確定である。ここに記してある文字は、たんに{時の楔}のテーマにふれる一つの媒介となるにすぎない。

※₂₇ このことを把握した上で、たとえば構成リストに記された<資料>に出会いたいと考える場合には、このレジюмеに出会った経路を逆にたどって{自主ゼミ}実行委員会に問い合せてほしい。さらに、構成リストに記されていない表現の創出にとりくんでほしい。({あなた}による{時の楔}のパンフレット化～{ }化をふくむ。)ほんとうは、～してほしい、というより{私}と{あなた}が決して逃れられない関係性の場で相互にこのテーマに出会いたいのだが……。

※₂₈ この瞬間、{あなた}は、パンフレットとか発行の概念が転倒し、運動しはじめていることに気付いてくれるだろうか。ただし、安易に気付いてはほしくない。たとえば、{私}たちが印刷費用はおろか生活費にも窮している段階で公判の罰金、過料、訴訟費用の請求に対して、ずっと、印刷所としての裁判所や刑務所という発想がうかんでいた。それまでの過程にこめられているなにかが、前記のことに気付くための最低の条件の一つであるといっ

ておく。

※₂₉ ところで、{時の楔}という題名は、どこからきているのか。これらの題名を、{あなた}のえらぶものに変換(できれば双極変換)してもらおうとありがたいのだが、ともかく、この題名の前史過程についてふれておく。

※₃₀ 構成リストの中に示されているように、これは1972年に刊行された本の題名でもあるが、その編集・刊行・販売(資金回収)のすべてに<仮装被告(団)>が責任を負うという注目すべき特性をもつ。この特性がどのように現在までの{私}たちの課題に連続しているか、についてはそれだけでn冊の本にもなりうるので、ここで詳細を展開しない。というより、この本だけでなく、構成リストにあるさまざまな<資料>がn冊性を帯びていくような展開の仕方をこそ、{私}たちは目ざそうとしているのだ。

※₃₁ ただ、少なくとも、前史過程の時の楔が、時への楔、という方向性をこめて命名されていたとすれば、現在は、これとは逆に、時そのものが楔として、{私}たちに何かの対象化を迫っていることの喩としてもつかいたい、ということは強調しておく。これまでの通念に、すでに使用された表現や題名は後でくりかえし使用できない原則のようなものがあるとしても、それをこえて何かをやっていき、以前の題名や位相を双極変換的に復活させていく必要と責任を{私}たちは感じている。

※₃₂ < >語…とは何か。可視的なドイツ語は一つの契機にすぎない。本来、それは、人類史が現在までに獲得してきたと称する全ての学問・技術の、大学機構に象徴される枠に収監されている体系の個々の名称と考えるべきである。発想の危機的情況はさらに深い。一つの痛切なエピソードだけいうと、{私}たちが、1970年代のはじめから、表現の根拠の再検討をふくむ、徹底的な自己~世界批判をおこない、現象的な沈黙や(法廷などへの){不}

出頭を持続していたとき、あなた方は、言葉の意味をもっと大切に考えるべきだ、他者にもっとよく意志を伝えるべきだ、とくりかえし要請したのは、権力者だけでなしに、高名な思想家、教師や新左翼弁護士、活動家たちであった。

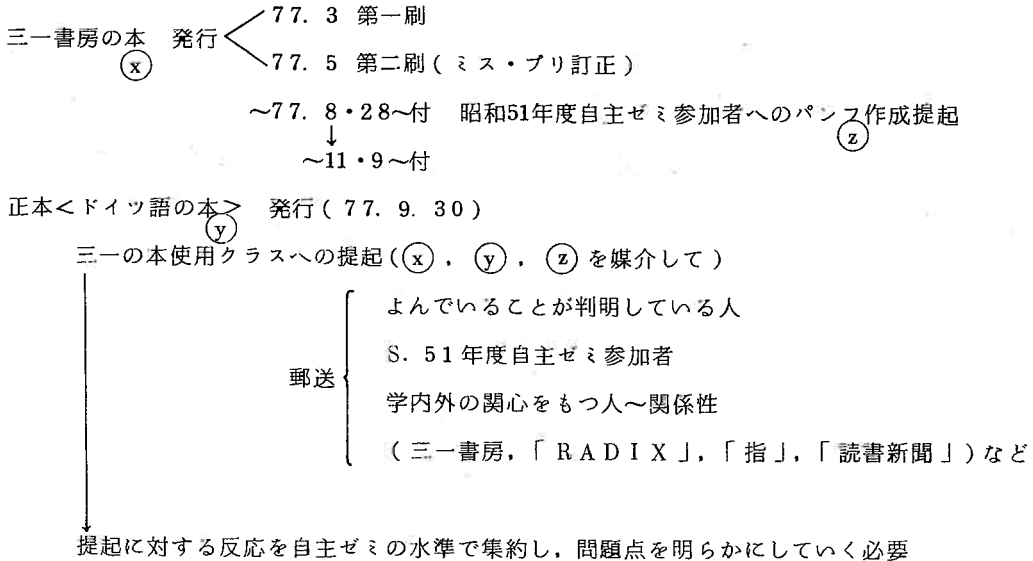
※₃₃ {私}たちは、意識的に反体制をとえつつ、存在の様式として体制を支えているかれらと深く訣別しているが、それだけが{時の楔}の作業を支える情念ではない。

※_{n-1}

※_n さいごに、あるいは、さいしょに提起したいのは、これまで提起してきたあるいは、これから提起していく{時の楔}は、その総体が、未字(約)書と名づけうる、なにかの{-}ページであるように構想されている、ということである。{ }のむこうに何を創出するにしても、少なくとも、{私}たちにとってはそこに未字的なものの生死がかかっている。

参照すべき<資料>の一部を掲載しておく。

1977・12・6 拡大自主ゼミに至る過程



(\textcircled{x}) の使用が、学期~学年の時間性に対応して n 回くりかえされていく、この意味)

(\textcircled{x}) のミス・プリ訂正、内容へのいくつかの方向からの批判

(\textcircled{x}) のあとがき、に予告されている改訂作業 (内容のみならず、使用~運動過程として)

この作業の媒介の一つとしての 正本<ドイツ語の本> (\textcircled{y})

はみだしてくる内容~問題点を

より包括的なパンフ (仮題; 時の楔 - < > 語...に関する資料集) へ

\textcircled{z}

(\textcircled{x}), (\textcircled{y}), (\textcircled{z}) の総体にかかわることが、

(\textcircled{x}) を媒介して単位を問題にする、ないしは (\textcircled{x}) をよみはじめる前提条件の一つであり、この条件の実現が、S. 51年度自主ゼミ参加者 (とくに <相互評価> によって卒業した人の責任~) に関わっている。

この提起 (に関連するさまざまな問題群) が、どのような情況的位相にあり、提起のしられる湾曲をどのようにとらえ、応用していくか……。

{1978・1・20 拡大自主ゼミ} レジューメ

α. 前回の拡大自主ゼミ(1977・12・6)から持続しているテーマ

- 三一書房「ドイツ語の本」の改訂作業の位置と成績評価〜との関連
(出席〜欠席にかかわらず、さげられない問題^{から}へ^の>出立)
- 試験〜レポート〜採点〜成績カード記入提出〜過程に、参加者(「ドイツ語の本」にかかわる全ての当事者)が、いかにかわりうるか? (昭和52年度自主ゼミの<相互評価>方法の現在の展開。昭和52年3月の教授会否決以来、昭和53年度自主ゼミを申請していない意味。)

- 正本<ドイツ語の本>を媒介する作成〜配布〜過程の膨大な事実性の開示〜応用。
(提起にこたえない人たちの意味)

※例; 1977・12・7 仮装講演会〜における経過。1977・12・2とその次回〜の{ }公判における{証言}。

- パンフ{時の楔}—< >語…に関する資料集。

内容〜発行費〜発行時期

↳ {
どこから、どのようにしてつくりだすか?
その意味は何か?

- 1・20 拡大自主ゼミを、どこへ、どのように持続させるか?

β. αのテーマ群は、1970年代の状況〜存在の中で、各人の〜生活〜の根拠と、どのように交差しているか?

断片的ヴィジョンとして、

- 単位制は、大学機構〜体制のみならず、個々人の家族の生活史の幅を包括して論じ〜していく必要がある。
(親の戦争〜体験をふくむ)

例; 77・12・15 卒業生の自宅訪問の経過。

- 表現媒体のいくつかの宙吊り〜の情動的意味。
- 原稿掲載拒否例と「ドイツ語の本」問題の関連。
- 自主ゼミ(へのかかわり方)への疑問〜異和を、総体的にとらえていく必要性。

例; 菅谷→松下あて書簡(1・13)と松下の返信(〜1・20〜)

- 映画<共同性の地平を求めて>の上映を契機とする岡山大学'70処分以降の問題点。
- 処分〜を比喩とする裁判過程(例; 徳島地裁行ウ n 号)へのかかわり方。
- {卵}裁判の最高裁上告棄却('77・11・1)と訴訟費用請求〜。(<労役>との関連)
(<ハンカチ>の返還〜)

γ. いま提起していないテーマ群は何か? それを提起〜していく方法は何か?

{ 構成リスト } に関する註

～1978・9・23～

{ 自主ゼミ } 実行委員会 気付 { 松下 昇～未字 }

この { パンプ } における < 資料 > の構成は、1978年3月段階で基本的な構成を完了していた。それぞれの配列は、時間順によってではなく、関係性の流れに応じてきめていこうとした。とはいえ、それらは固定したものでありえず、{ 私 } たちは、構成リストを作っていく過程が、< 資料 > から最も遠いどこかへ { 私 } たちをつきうごかしていく媒介となることをめざしてきたのである。その意味から、< 資料 > 群は、次の三つの位相の複合としてとらえることができる。

1. 制度上の自主ゼミ参加者に対する提起と反応。
2. < 資料 > 群のそれぞれの出現にかかわった主体～問題にかかわり続ける人に対する提起と反応。
3. この { パンプ } を企画する人～それを必然とする情況に対する提起と反応。

可視的には、次のようなテーマを媒介に構成されている。

なにかのはじまりを告げる < 資料 >

戦後の掲載拒否例に関する < 資料 >

< ドイツ語 > ～が審理される公判の < 資料 >

表現過程の審問情況性に交差してくる < 資料 >

三一書房企画の < ドイツ語の本 > 作成過程の < 資料 >

三一版<ドイツ語の本>の流通過程にひきよせられる<資料>

正本<ドイツ語の本>の巡礼過程が単位を媒介に出会う<資料>

拡大自主ゼミに関する<資料>

～拡大自主ゼミ～の拡大性に関する<資料>

{卵}～{ハンカチ}を比喩とする<資料>

{ } 公判の上告～再審請求過程の<資料>

{時の楔} 企画を媒介する<資料>

<占拠中のゼロックス室>にかかわる<資料>

<資料>からはみ出し、かつ、めぐりあいつつある<資料>

.....

前記のテーマの下に、それぞれ数十の表現が含まれ、相互に関連を明示してある。
{時の楔} レジューメにも記したように、これらの<資料>は、1977年10月から、1978年3月までの<6>カ月間に対象となった基本的な表現である。その位置を、現在どのようにとらえなおしていくことが必要であるか、を考えてみよう。

{自主ゼミ}の活動が、とりわけこの期間に、これほど膨大な表現とかかわりをもったことへの驚きが、まずある。それらを構成し、開示し、応用しなければ、個々の表現に内在する生命が死滅しかねない、という切迫感もより深まっている。それは、個々人の主観というよりは、なにかの声、としてそのなま_うであるが、一方、

それを引きうけ実現して行く条件は { 0 } といってよい位である。先述の < 6 > カ月間以降の < 6 > カ月間、この問題の重さが増殖する < 資料 > と共に { 私 } たちを圧倒し続けている。しかし、この問題は時間をかけて解けばよい、という位相にはなく、いわば時間性との格闘をふくめて実現されない限り、意味を失う性質を帯びている。

ここで { 私 } たちは、具体性としての < 資料 > に出会う方法を、レジュメにのべた水準で確保しつつ、時間性との格闘の総体的な手ざわりとして、いま { あなた } が目にふれている位相でも出現させることを決意した。そして、この試みが無数にありうる { 時の楔 } プランの一つの不可欠の構成要素にしかすぎないことも自明である。 < しかすぎない > 存在が、全世界を変革しうることがあるし、それを { 私 } たちは目指すけれども、 { あなた } 方の共闘なしに、実現はしえない。

{ 時の楔 } パンプの出現は、何をいかにうみだしうるか。その一つの具体的ヴィジョンは { 時の楔 } 通信 (仮題) の構想である。今回のパンフに掲載しえないものを、必要に応じて少しずつでも持続的に掲載し、その < 資料 > が現在のにもっている意味に { 註 } を加えつつ、表現を生かす場の創出に応用していく。前述した構成リストは、 < 6 > カ月間に会った < 資料 > であるが、これを 1974 年以降の制度と交差する { 自主ゼミ } 過程、さらに大学闘争以降の全ての < 資料 > に深化 ~ 拡大していきたい。この時間性の幅は、過去にではなく、未来へこそ飛翔させるためにさしのべられている。 { 私 } たちはこの場合、 < 資料 > の内容のみならず、出現や運動の経過をふくむ表現過程総体を対象化していく、という原則をつらぬくつもりである。

なぜ、このような原則が要請されるのかというと、たとえば、1969・2・2 の < 情況への発言 > は、それがたんに掲示板にはられたという契機をもつだけであるにもかかわらず、その後のバリケード情況、処分 ~ 起訴 ~ 公判過程にもつ意味は、決して単なる掲載 ~ 転載によっては測りえないし、起訴状で “「く」の字形十二個” と記述されている 1970・1・8 の黒板上の表現は、掲載自体が { 不 } 可能であり、その困難さとの距離をみきわめずに、 < 資料 > としてとらえることはできないからである。これらは、断片的な例にすぎない。大学闘争の世界 (史) 性からみれば

は、だれの、どのような表現についても、その意味がどのように現在まで持続しているかを、全てのテーマ～現実構造との関連でとらえようとしない限り、ついに表現されきったとはいえない。表現されつつあるものの方向性や位置が、どのように持続～変化するか、という恒常的条件の追求が主要な課題の一つになるだろう。

そして、ここで{私}たちが表現というとき、国家が処罰しようとする行為や、闇の領域に深く閉ざされている対的な感覚や、日常言語にさえ到達しえないまま次の世界へ永遠に巡礼したものの微笑をもふくんでいる。これらの表現のむこうにあるものに生命を与え、全ての抑圧的な関係性を破碎していくためにも、パンフ{時の楔}は、{時の楔}通信～と共闘しつつ、また、いま予測しえない表現を包括しながら、{あなた}の存在しはじめる風景へ舞い立っていくだろう。

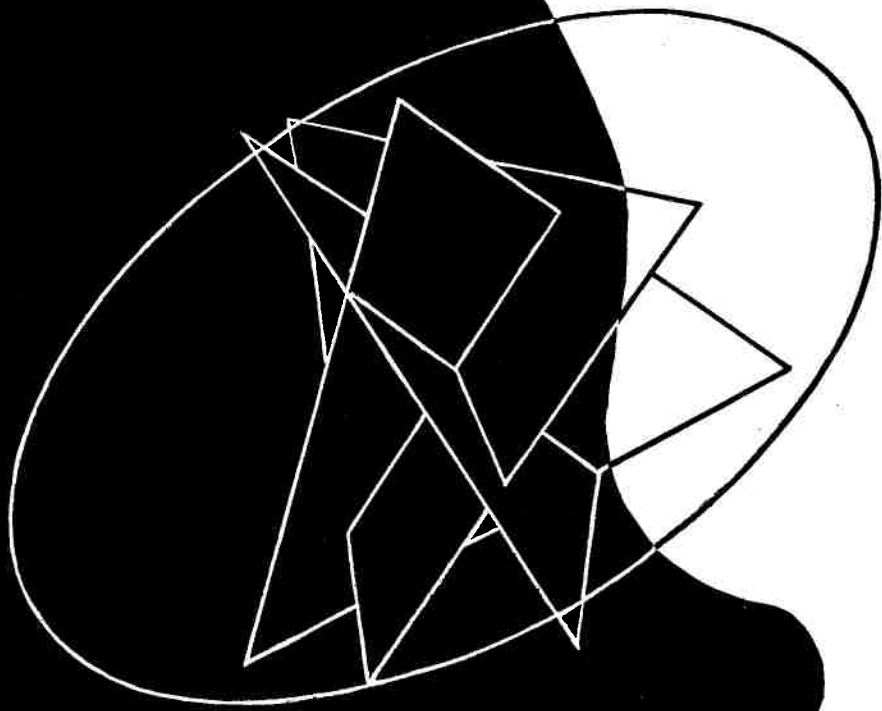
時の楔

< >語…に関する資料集

編集～発行 京都市左京区二本松町
京都大学教養部
<占拠中のドイツ語ゼロックス室> 気付
{自主ゼミ}実行委員会

発行期日 ～1978・10・16～

{不}定価 {あなた}の{ }性と交換～～



{自主ゼミ}

実行委員会